

折々の銘 1

【萬歳】ばんぜい

皆様、明けましておめでとうございます。

皆様は最近、万歳三唱をなさいましたか。皇居参拝をなさる方や選挙に縁のある方は機会がありかもしれませんが、私は小学校の運動会以来ご無沙汰です。

「萬歳」＝「万歳」は漢音では「ばんぜい」、呉音では「まんざい」と読みます。近年では「バンザイ」と読みますが、これは明治以降の造語で呉漢併存となります。

文語としての「万歳」は賀詞(祝いのめでたい言葉)と新年を祝う民俗芸能の一種との二つの意味がありますが、これを漢音と呉音で読み分けていたようです。

万歳[ばんぜい]は長い年月を意味し、永遠の繁栄、国家の長久を祝う言葉です。それが幅広く慶事に際し、主に集団で両手をあげて祝して叫ぶ言葉となりました。近年では国家的慶事は勿論のこと、個人の長寿や繁栄、目標の達成や事業の成功、勝利の喜びを表す言葉として幅広く用いられています。千秋万歳[せんしゅうばんぜい]も同義です。

千秋万歳を「せんずまんざい」読めば年頭に滑稽な踊りに賀詞を唱える門付(かどづけ)芸の意味となります。略して万歳[まんざい]ともいいます。室町時代には既にある芸能ですが、ことに江戸時代初期より流行した三河万歳[みかはまんざい]は有名です。三河万歳は中啓[ちゅうけい]とよばれる扇の一種を持った太夫[たゆう]と鼓を持った才蔵[さいぞう]が賀詞を掛け合いながら舞い、新年の訪れを祝福する芸能です。

日本で万歳という言葉は既に『続日本紀』天平八年十一月に見えますが、集団で万歳を唱えたと思われる記録は『同』天平十七年五月が初見です。「時に百姓、遥かに(中略・聖武天皇の姿を左側から拝し)共に万歳をとなふ」とあります。さらに『同』延暦七年四月には、日照りの際、桓武天皇の祈りにより雨が降り、「群臣、舞蹈して万歳を称へずといふこと莫し」とあります。「臣たちはみな踊りあがり、万歳と称賛しない者はいなかった」というのです。「舞蹈」を「踊りあがり」と訳しましたが、実際にどのような動きであったのかはわかりません。今日の万歳三唱のような行為であった可能性も大いにあります。私の知る限りではこれらが記録に残る日本最古の集団による万歳です。

既に奈良時代には、万歳という言葉は感動詞のように使われていたことがわかります。

20世紀前半、日本人の万歳[バンザイ]には残念ながら戦争のイメージが伴っていたように思われます。勝者が万歳を唱え、敗者が悲しみと憎しみを募らせる、それが戦争というものでしょう。

一日も早く、世界中の人々が心の底から万歳と言い合える世になって欲しいものです。